

館報 教育記念館

No. 75
平成22年11月 発行



きらめき未来塾「思考道場・スペシャル公開講座」



第8回「さんすうワールド・クイズ&パズル」展

主な内容

◎教育時評 富山県教育委員会 生涯学習・文化財室 室長 木下 晶	2
◎財団事業、今年度後半展示予定	3
◎特別展「校名・校章・校歌と教育への期待」展	
第1回「児童・生徒によるものづくり」展	4
◎きらめき未来塾	
・開講式	
・思考道場	
・お笑い道場	
・右脳活用道場	
「さんすうワールド・パズル&クイズ」展	5
◎第20回 郷土の先賢顕彰者	
●萩野 昇	
●太刀山峰右衛門	6
●吉田 鉄郎	
●継続顕彰者	7
◎恒例展「子どもの目・自然不思議発見写真」展	8



発行所/財団法人 富山県ひとづくり財団 富山県教育記念館 〒930-0018 富山市千歳町1-5-1
TEL(076)444-2000 FAX(076)444-2001 E-mail:toyama@t-hito.or.jp http://www.t-hito.or.jp
(教育記念館会議室ご利用の場合 ☎(076)433-2770)

発行人/富山県教育記念館 館長 伏黒 昇 印刷所/いおざき印刷株式会社



ともに学ぶこと 共感と謙虚

富山県教育委員会 生涯学習・文化財室
室長 木下 晶

昨今、教育の成果についてさまざまな論議があるが、昔から成果が問われてきたのが大学の医学部教育である。医師の育成には公私にわたる大きな負担と長い年月を要する。国家試験に全員が合格し、責務にふさわしい学力と人間力を向上させることが至上命題である。しかし、講義やセミナーだけでは、いかに優秀な学生たちであっても、全員の意欲を維持し続けることは難しい。そこで多くの医学部が実践するのが「屋根瓦方式」と呼ばれる教育である。教員のスーパーバイズのもと上級生が下級生をマンツーマンで指導する様子を、屋根瓦の重なりになぞらえたものだ。

「屋根瓦は、研修医の時に実践しました。あれは教える側が伸びるのですよ。」前任校の学校医はこうおっしゃった。上級生は、ローマの評論家セネカの「教えることは最高の学習」を経験し、学習の質を高める。下級生は気軽に質問できるだけでなく、目標を目指しともに学ぶ共感を体験的に身につけていく。高等教育で、こうした学び合いの場が設けられ、成果をあげていることは注目してよい。

一方、初等中等教育では、例えば上越教育大学西川純教授による「学び合い」があげられる。小学校の授業中に「全員が達成する」目標を掲げ、ともに学ぶ共感のもとで子どもたちはさまざまに創意工夫する。何年も九九を覚えなかった子どもは、友人らに「覚えたら便利だよ。二・二んが四、二・三が六・・・」と勧められ程なく覚えてしまう。自分が理解した内容を友人に分かってもらうため指導案を練り始めた子どもなど、全員の学力と友人を思いやる力が向上したと聞く。

また、県内高校には、中学校の要請で長期休業中に中学生への教科指導に、生徒が取り組んでいる学校がある。活動後の高校生の感想では、「教えることは予想以上に難しく、十分に準備し、分

かってもらえた時はとてもうれしかった。」「高校の授業も受身でなく、自分ならどう伝えるかを考えて学習を深めるようになった。」など、手応えとともに学びの質を向上させている。中学生には、高校生の説明が分かりやすく好評だったという。目線を合わせて謙虚に教え、ともに学ぶ先輩への共感が、理解度を高めたといえる。

これらの活動で、教員は学習の目標を示し、共感的活動となるよう、スーパーバイズするなど、学びの場を創り出す役割を果たしている。

ちなみに、社会人がともに学ぶ場として、本県の県民カレッジ自遊塾がある。ボランティア教授と学習メニューを県民から一般募集する、都道府県では全国唯一の事業である。「メダカの学校」を標榜し、学びの共感があふれる講座からは15年間に多くの人材、NPOや民間カルチャー、さらには富山インターネット市民塾などの自主的な社会活動が生まれ、大きな成果をあげている。このように、子どもから大人まで、共感とともに学ぶ場はさまざまな実りを生んでいる。

さて、富山市出身で、日本を代表する国語学者の山田孝雄博士は、「中学生に導かれて」という一文で研究のきっかけを述べている。中学教員だった若き日に生徒の質問に回答にできず、不明を謝り、以後の研究で『日本文法論』をまとめた。この一文には、生徒に目線を合わせ、真摯に向き合う思いが溢れている。山田博士にとって教室とは自ら謙虚に学ぶ場でもあったといえる。

人は誰もが、一生のうちに家庭や職場などで学び教えている。そうした際も、人間としての共感と謙虚な姿勢は、よりよく学び伝えるための大切な秘訣である。学校や社会を問わず、より多くの人と一緒に学ぶ活動を経験することで、一人一人の実り豊かな生涯や、世代を超えた社会の継承と創造につながるものと考えている。

元気な地域づくり活動を行う人材の育成及び支援事業

主催 (財) 富山県ひとづくり財団

平成22年度「学ぼう！ふるさと未来」支援事業 (助成対象校1校に10万円助成)

— 将来にわたって、ふるさとを愛し、ふるさとに誇りをもつ子どもの育成を願い、
地域と連携して「ふるさと学習」に取り組む学校を支援します —

助成校	実践テーマ
南砺市立上平小学校	上平地区の伝統文化にふれる活動や自然を守る活動を通して、郷土のよさを知り、自ら守り育てようとする子どもの育成
高岡市立太田小学校	伝えよう！ふるさとの心
高岡市立平米小学校	地域の自然や歴史、伝統文化、ひとつとかがわることを通して、ふるさとに愛着をもつ子どもの育成
立山町立立山小学校	地域(人・もの・こと)とのかかわり合いを通して、地域へのあたたかい思いや考え(「土着の心」)をはぐくむ子どもの育成
魚津市立上中島小学校	地域の歴史や文化を調べたり、伝統行事を守る人々と交流したりすることで、地域のよさを見つけ、そのすばらしさを伝え、自分にできることに取り組もうとする子どもの育成

平成22年度「水みらいプロジェクト」支援事業 (富山県ひとづくり財団及び富山・水・文化の財団から各5万円助成)

— 小中学生に「水」に関する学習や調査活動を通して、「水」に対する興味を高め、
「水・環境」の大切さを認識する実践に取り組む学校及び団体を支援します —

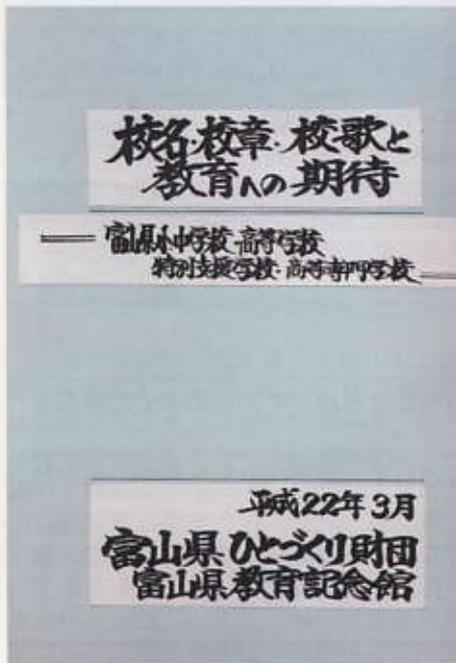
助成団体	活動テーマ
氷見市立湖南小学校	まもろう！ふるさと湖南のすばらしい環境を ～ホテルとシジミの生息調査を通して～
反保島環境保全 児童クラブ	三世代交流・ホテルの住むまちづくり
砺波市立庄南小学校	大切にしよう わたしたちの庄川
射水市立放生津小学校	みつめよう 私たちのくらしと環境 ～クリーンエコピア はとっ子～
射水市立大門小学校	大門水調査隊
富山市立池多小学校	わたしたちのピオトーブ大作戦
くろべ水の少年団	黒部川の水環境を調べる

毎年、4月に開催される「県小・中校長会」にて、上記支援事業の実施要項を配布しています。

平成22年度後半の展示予定

- | | |
|-----------------------------|---------------|
| ○第28回「特別支援学校・みんながんばってます作品展」 | 10月30日～11月14日 |
| ○第22回「富山県造形教育作品展」 | 11月20日～12月5日 |
| ○第6回「アイデアロボットフェスタ・ロボット展」 | 12月11日～1月23日 |
| ○第21回「富山県中学校美術展」 | 2月5日～2月20日 |
| ○第58回「富山大学学生卒業記念書展」 | 2月26日～3月4日 |
| ○第4回「富山県版造形教育作品展・秀作回顧展」 | 3月12日～4月10日 |

特別展 「校名・校章・校歌と教育への期待」展



資料集について

平成21年度県内小学校、中学校、高等学校、特別支援学校、高等専門学校全てに原稿を依頼し、寄せられたものを、県内小・中・高等学校の先生方に検討していただき、まとめたものです。当初、県内各校及び教育機関に配布し、活用していただく予定でしたが、著作権の対応が予想以上に難しく、資料収集に止めざるを得なかったことを大変残念に思います。ただし、富山県教育の歴史の一端として保存し、教育関係各位の利用に供したいと考えています。

第1回「児童・生徒によるものづくり」展



伝統的、独創的、技巧的な作品の制作に取り組んでいる学校が多く、優秀な作品が生まれ出されています。しかし、それを一同に会し発表する場がありませんでした。新たに教育記念館において「ものづくり展」を行い、児童・生徒の技術力や創造力の一層の向上を目的として、広く県内諸学校、県民へ公開することとしました。今後、恒例展として開催していく予定です。

きらめき未来塾(夏休み期間中)



開会式
村井和塾長あいさつ



お笑い道場
講師 三遊亭 圓窓
(落語家)



右脳活用道場
講師 ねじめ 正一
(詩人・作家)



思考道場
県内講師 (藤森一彰、森 雅美、
堀井祐一、勝原亜希子)

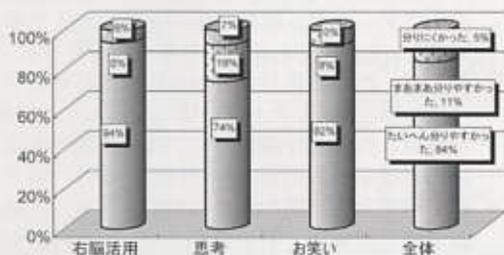


思考道場・スペシャル公開授業
講師 秋山 仁
(数学者、東海大学教授)

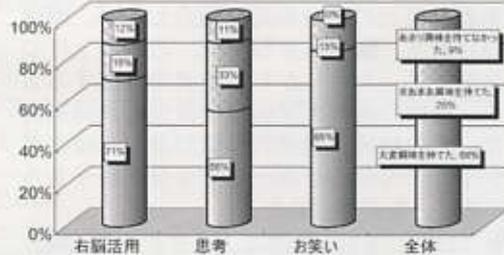
子どもたちの発想力や創造力、ユーモアのセンスなど多様な可能性を引き出すため、各分野の第一人者を講師に招いて3つの道場を夏休み中に開催。県内全小学校に5月末、チラシを配布し、希望者を応募して未来塾を開催しました。

平成22年度 きらめき未来塾参加者アンケート結果

◆道場の内容はわかりやすかったですか？



◆道場の内容に興味をもてましたか？



「さんすうワールド展 -パズル&クイズ-」

7月25日(日)～
9月5日(日)



第20回 郷土先賢室顕彰者紹介

イタイタイ病研究の父



はぎののぼる
萩野 昇

(1915~1990)

婦負郡熊野村(現・富山市婦中町)萩島の医師の家に生まれた。金沢医科大学(現・金沢大学医学部)で病理学を専攻。昭和15年(1940)、卒業後、同病理学教室の研究生となる。同年10月に応召入隊。昭和21年(1946)、復員した萩野は、大学にもどって病理学の研究を目指そうとしたが、実家の「萩野病院」を継いだ。

開業してまもなく、全身の骨がもろくなって、身体全体が萎縮し、手足や腰の激痛から歩くこともままならず、握手や咳をただけで手や胸の骨が折れるという難病の患者たちに遭遇することとなった。患者たちは「痛い痛い」といいながら衰弱死していった。このため萩野病院ではいつしかこの病気を「イタイタイ病」と呼ぶようになった。患者の大部分は40才以上の農家の主婦であったため家庭崩壊を起こす例が多く、家族は呪われた業病(前世の悪業の報い)でかかるとされた、治りにくい病気として世間に知られるのを恐れ、患者を隠した。

萩野は患者を地元の総合病院へ紹介したが、明確な返答が得られず、開業医としては、これ以上打つ手のない状況であった。しかし、患者を放置する気にはなれず、母校の金沢大学病理学教室に共同研究を依頼した。その結果、患者の腎臓が著しく障害され、カルシウムの再吸収が悪化して全身の骨がもろくなっていることを突き止めた。

昭和30年(1955)8月、新聞に「イタイタイ病」が大きく報じられた。これにより、「イタイタイ病」は全国的に知られ、大学の専門家が萩野と精力的な共同研究を行うようになった。しかし、数年にわたる研究でも、栄養不良、過労、ビタミン不足、日照不足以外に原因となるものが見つからなかった。しかし、萩野はこの結果に納得できなかった。

一方、萩野の研究は、自分の売名行為に利用したのではないかと罵られ、様々な脅迫も受けた。それでも、研究を諦めなかった。昭和32年(1957)、「イタイタイ病」鉍毒説を発表し注目を集めた。

その後、小林純岡山大学教授や吉岡金市農学博士らとの共同研究により、三井金属神岡鉍業所の廃水中のカドミウムによる骨軟化症と断定した。政府もこれを認め、公害病と認定した。萩野は患者の治療にあたるのと同時に、国会や「イタイタイ病」裁判では、医師の立場から患者の苦痛の実態を証言した。

イタイタイ病患者の治療に献身的に尽くし、患者から慕われ、数々の賞も受けた。平成2年(1990)6月、多くの人に惜しまれつつ病没。享年74才であった。

専門委員 松本 淳

突っ張りで無双を誇った名横綱



たちやま みねえもん
太刀山 峰右衛門

(1877~1941)

横綱在位14場所(年2場所制、1場所は10日間)で、84勝、喫した黒星はわずか3つ、勝率9割6分6厘。「四十五日の鉄砲」(一突き半の洒落)という強烈な突きと、四つに組んでは「仏壇返し」の荒技を得意とした、太刀山の戦績である。

太刀山こと老本彌次郎は、明治10年(1877)8月15日、茶園を持つ老本家の次男として、婦負郡吉作村(現・富山市吉作)に生まれた。持ち前の怪力で揉む彌次郎の茶は、品評会で必ず優勝した。明治29年(1896)20才の徴兵検査のとき、ずば抜けた体格と腕力が新聞種となった。この噂を耳にした友綱親方が入門を勧めたが、長男が早世した老本家では、掛け替えのない跡取りであり、本人にも父にも断られた。諦めきれなかった友綱親方は、板垣退助(自由党総理)や西郷従道(内務大臣)、さらには阿部浩(富山県知事)らに協力を要請した。その結果、明治32年(1899)友綱部屋に入門した。四股名は、地元の「立山」にちなみ、また「常陸山(ひたちやま)」に迫れという願いを込めて、板垣退助により「太刀山」と命名された。

不承不承の入門で、身の入らない稽古を続けていた太刀山であったが、巡業で象のように肥えた草相撲大関と対戦し、習いたての突っ張りを入れたところ、相手がすっ飛んだ。この勝利が太刀山を相撲に目覚めさせ、自分から挑む稽古は、した分だけ突っ張っていったのである。

並外れた天分が備わっている太刀山である。打ち込めば出世は早い。明治33年(1900)5月、幕下付け出し、初土俵で全勝。明治36年(1903)1月、入幕。翌年、前頭筆頭で初優勝。明治38年(1905)5月、小結を飛び越して関脇に昇進。明治42年(1909)6月、大関に昇進。大関昇進には4年間を要しているが、これは当時の番付が東西別であり、上位が詰まって阻まれていたためである。この間、明治40年(1907)5月、横綱常陸山に初勝利、もはや敵なしとなった。

明治44年(1911)5月、第22代横綱に昇進した。この年9月1日から3日間、富山市日枝神社境内で東京大相撲の興行が行われ、新横綱土俵入りを披露し、故郷に錦を飾った。太刀山は新大関で2敗したが、その後引退までは3敗(43連勝後の西ノ海戦、56連勝後の栃木山戦、大正6年1月の大錦戦)しかしていない。結果的に大錦戦が最後の相撲となり、翌年1月、41才で引退し、年寄東関を襲名。後進の指導にあたるもまもなく廃業。昭和16年(1941)4月3日、逝去。享年64才であった。生家近くの吉祥寺に眠る。

現在、富山市立呉羽小学校に「太刀山道場」という相撲場がある。昭和15年(1940)に太刀山自身の寄付で建てられた「相撲殿」が始まりだが、一時取り壊された後に、太刀山の遺族の寄付により、昭和55年(1980)に再建されたものである。相撲の盛んな呉羽の地には、今も脈々と太刀山の思いが流れているのである。

専門委員 平野 強

平成22年度も引き続き 顕彰される郷土先賢者

日本的なモダニズムを开花させた 建築家



よし だ てつ ろう
吉 田 鉄 郎

(1894~1956)

吉田鉄郎は、明治27年(1894)5月18日、礪波郡福野町(現・南砺市)で、葉種業・郵便局を営む五島家の三男として生まれた。第四高等学校を経て、大正4年(1915)、建築家を目指し東京帝国大学へ進んだ。大正8年(1919)、当時の通信省経理局営繕課に入省。時代の気鋭であった通信建築に携わり、日本の近代化の流れの中で、材料や構造、目的に沿った堅実で合理的な標準設計を生み出した。この年、吉田芳枝と結婚し吉田姓を名乗る。以後、一時は結婚を患い養生することとなるものの、海外建築から日本の伝統建築までを研究した。そして、多くの通信建築を通して日本的な建築を追い続けるとともに、優れた後輩を輩出した。

吉田建築の初期は、北ドイツや北歐風の建築に影響を受けながらも進むべき独自の方向を模索していた。当時、ヨーロッパでは過剰な装飾を廃し、合理的・機能的な様式の建築や設計を指向するモダニズム運動が大きな動きを見せていた。昭和6年(1931)の欧米視察では、のちに日本に亡命し、日本の伝統建築にモダニズムに通じる価値を見出したブルーノ・タウトとの出会いがあり、来日したタウトを桂離宮などに案内したのは、ドイツ語が堪能だった鉄郎だった。以後、建築の方向性を見出した吉田建築は全盛期を迎える。

吉田鉄郎の代表作は、昭和6年(1931)に建てられた東京中央郵便局(現在一部保存改築中)である。装飾が少なく控えめな白の外観、柱と梁でないところは全て黒の窓という当時珍しいシンプルで大胆な設計であった。それは、ヨーロッパのモダニズム建築の影響を受けながらも、模倣ではない日本的なものを表現した最初の現代建築として国際的にも評価されている。また、昭和12年(1937)の木造2階建て馬場はる邸(現・最高裁判所長官公邸)は、日本住宅の特徴を備えた住宅設計の代表作として、モダニズム運動の中心として活動したドイツ工作連盟の機関誌にも紹介されている。

近代建築の素材である鉄やコンクリートを用いながらも、窓などの開口部を大きく取る白やアースカラーの建物。端正で慎ましく地味な木造建築。飾り気のない真面目で誠実な人柄を表す設計は、内外の建築に通じつつ、「清らかさ」を日本的なものの中心におく鉄郎ならではのものであった。その根底には、ふるさと風の風土が横たわっているのかも知れない。

昭和19年(1944)通信省退職後は、日本大学で後進の育成に当たり、北陸銀行新潟支店などを手掛けるなど生涯を日本建築界に捧げ、昭和28年(1954)には日本建築学会賞を受賞した。

昭和31年(1956)「日本中に平凡な建物をいっぱい建てたよ」と語り、62才の生涯を閉じた。

専門委員 宮崎 靖

ユーモア小説の直木賞作家

源氏 鶏太 (1912~1985)

富山市泉町に生まれる。父は家庭薬配置業を営む。富山商業高校へ進学し、4年生頃から詩作に熱中。昭和5年、合資会社に入社し、勤めの傍ら寸暇を惜しんで小説を執筆し、昭和9年、「村の代表選手」が報知新聞・ユーモア小説の第一席に入選、その頃から「源氏鶏太」のペンネームを使っていた。その後、自らの体験を基に、サラリーマンの泣き笑い人生を温かく描いた作品を書き続け、サラリーマン小説という新分野を開拓した。昭和26年、短編「英語屋さん」等により、直木賞受賞。昭和31年、会社を退職し、作家一筋に歩み、妖怪小説ともいえる新分野を開いた。

人の生きざまを演じた異色の演技派女優

左 幸子 (1930~2001)

昭和5年、物流や文化の交差点として賑わい、演劇・芝居の上演も盛んだった朝日町泊に生まれる。昭和22年、高校卒業後、上京。大学を卒業し体育・音楽の教師になったものの、2年後に退職し、俳優座で演劇を学び始めた。昭和27年「若き日のあやまち」、昭和30年「女中っ子」で主演。バイタリティあふれる演技は高い評価を受け、左幸子の名声を高めた。羽仁進監督「彼女と彼」では、日本人として初めてのベルリン国際映画祭女優賞を獲得した。また、テレビドラマにも活躍の場を広げ、母親役の好演もよく知られた。

シュルレアリスムを追い求めた 詩人・美術評論家

瀧口 修造 (1903~1979)

修造は、富山市寒江に医師の長男として生まれる。両親は医師の道に進むことを期待したが、絵を描いたり、文学書や古今の書籍に興味を示す少年であった。慶應義塾大学で西脇順三郎教授との出会いから、モダニズム詩の運動やシュルレアリスムの芸術を知り、影響を受けた。その後、詩編を発表したり、翻訳などを通して、前衛芸術運動の旗手として次第にその名が知られるようになった。戦後は、広汎な芸術批評活動を行うとともに、現代美術の発展に指導的役割を果たした。また、自らも詩人、美術作家として、日本美術史に大きな足跡を残した。

「子どもの目・自然不思議発見写真展」

9月12日(日)～10月10日(日)



あさひ (1年)



おにわの花 (1年)



夏の空におよぐりゅう。(2年)



カラフルピーマン (2年)



ねすみとパン (3年)



幻のラピュタ発見 (3年)



雨としょうぶ (4年)



おしゃれなカミキリ虫 (4年)



あっ!きじだっ! (5年)



塩の結晶 (5年)



クローバ3兄弟 (6年)



ちょうがいっぱい (6年)

小学校63校、中学校3校より217点の応募があり、全作品を額装し展示しました。



あ・と・が・き

今年度の各作品展ポスターが一新しました。伏黒昇新館長の手描きによるものです。来館者のみなさんに大好評。作品展の展示内容もそれにふさわしいものになるよう工夫を加えて行きたいと意気込んでいます。たくさんの方々の来館を期待します。

